



2019 年特別展

『日本スポーツ界を彩った先人』展

～2020 東京オリンピックへのエール～



会期：2019 年 1 月 5 日（土）～12 月 25 日（水）

会場：徳富蘇峰記念館 1 階

主催：公益財団法人徳富蘇峰記念塩崎財団

展 示 書 簡

| 人物情報   | 解 説  |
|--|--|
| <p>かなくり しろう<br/><b>金栗 四三</b></p> <p>(マラソン)</p> <p>明治 24 年～昭和 58 年<br/>(1891～1983)</p> <p>熊本県玉名市出身<br/>[蘇峰より：28 歳年下]<br/>[当館所蔵書簡：1 通]</p>               | <p>陸上競技選手。全国マラソン連盟会長、日本陸上競技連盟顧問。明治 43 年東京高等師範学校(現筑波大学)に入学し、校長の嘉納治五郎から長距離走の才能を見出された。明治 45 年ストックホルムオリンピック大会(第 5 回)に初の日本人選手として、短距離走の三島弥彦とともに出場。競技途中、日射病と慣れない土地での体調不良のため倒れ、記録の残らない状態でレースを終了した。大正 9 年アントワープ大会は 16 位、大正 13 年パリ大会では途中棄権となり選手生活から引退した。世界に通用するランナーを育成するため、東京箱根間往復大学駅伝競走(箱根駅伝)の開催(第 1 回・大正 9 年)に尽力し、日本に高地トレーニングを導入。マラソン界の発展に大きく寄与し「日本マラソンの父」と呼ばれる。金栗が使用したマラソン足袋は有名。</p> <p>……………◆展示書簡要旨 昭和 17 年 7 月 5 日付◆……………</p> <p>「日比野寛先生の喜寿祝賀会ではお忙しいところ御臨席、御講話いただき、日比野先生他一同感激しております。その際いただいた祝詞を記録し忘れてしまいました。誠に恐縮ですがその要旨をお送り頂きたい。」重鎮・蘇峰に対しても臆することなく丁重に依頼をしている。(昭和 17 年 5 月 31 日赤坂の三会堂に於いて開催された「日比野寛翁喜寿祝賀講演会」で、蘇峰は「喜寿を祝して」と題し講演している。)</p> |
| <p>まえはた ひでこ<br/><b>前畑 秀子</b></p> <p>(結婚後は兵藤姓)</p> <p>(水泳)</p> <p>大正 3 年～平成 7 年<br/>(1914～1995)</p> <p>和歌山県橋本市出身<br/>[蘇峰より：51 歳年下]<br/>[当館所蔵書簡：4 通]</p> | <p>地元の紀ノ川で泳ぎを覚える。高校卒業後は家業の豆腐屋を手伝うつもりでいたが、前畑の才能を高く評価した椋山女学院の校長・椋山正式のすすめで水泳を続け、昭和 7 年ロサンゼルス五輪 200m 平泳ぎで銀メダル。昭和 11 年ベルリンオリンピックの同種目で日本人女性初の金メダルを獲得。「前畑がんばれ」のラジオ実況放送が全国を沸かせた。結婚後はママさん水泳教室などで指導し、平成 2 年に文化功労者となった。</p> <p>……………◆展示書簡要旨 昭和 14 年 10 月 21 日付◆……………</p> <p>蘇峰からの電報(内容は不明)に対する礼状。出征して 2 年 2 ヶ月が過ぎた軍医である夫のことを案じ、この電報が届いたときには「家中が、ああ凱旋の通知かと心躍らせた」と記してあり、前畑の天真爛漫な性格が読み取れる。「私も今では陸のカップとなりまして、毎日山の生活でございます」と疎開先の日常をユーモアを込めて吐露している。</p>   |

|   |  |
|---|--|
| <p>かのう じごろう<br/><b>嘉納 治五郎</b></p> <p>(柔道)</p> <p>万延元年～昭和 13 年<br/>(1860～1938)</p> <p>兵庫県神戸市出身<br/>[蘇峰より：3 歳年上]<br/>[当館所蔵書簡：1 通]</p>         | <p>講道館柔道の創始者。教育者。柔道・スポーツ・教育分野の発展や日本のオリンピック初参加に尽力するなど、明治から昭和にかけての日本スポーツ界の功労者。「柔道の父」と呼ばれ、また「日本の体育の父」とも呼ばれる。明治 42 年に日本人初の IOC 委員となる。昭和 11 年の IOC 総会で、悲願であった 1940 年東京オリンピック(“幻の東京五輪”)の招致に成功するが、支那事変等の影響からやむなく返上することとなった。</p> <p>……………◆<b>展示書簡要旨</b> 昭和 7 年 7 月 10 日付◆……………</p> <p>兵役義務者の経済的負担の分担を目指した「護国共済会」の評議員の役を蘇峰にお願いした依頼書。趣旨書と役員表が同封されている。嘉納はその副会長の一人に名を連ねる。封筒裏のサインは自筆と思われる。</p>  |
| <p>ひびの ひろし・ゆたか<br/><b>日比野 寛</b></p> <p>(マラソン)</p> <p>慶応 2 年～昭和 25 年<br/>(1866～1950)</p> <p>愛知県稲沢市出身<br/>[蘇峰より：3 歳年下]<br/>[当館所蔵書簡：28 通]</p>  | <p>教育家、政治家、衆議院議員。明治 32 年母校愛知第一中学の校長となる。体育奨励の教育方針に徹し、マラソン走に力を入れ、「上体はまっすぐ腰の上、運動は手と足で行なう」という“日比野式走法”の普及につとめた。「マラソン校長」と呼ばれる。日本におけるマラソン指導の始祖とも言われる。「病めるものは医師に任せ、弱きものは歩け、健康なるものは走れ、強壯なるものは競走せよ」と呼び掛けた。</p> <p>……………◆<b>展示書簡要旨</b> 昭和 20 年 7 月 13 日付◆……………</p> <p>7 月 10 日に開催された日比野の「八十寿祝賀会」に於ける蘇峰の祝辞へのお礼と、盛会だった当日の様子を記している。日比野が疎閑している木曾川周辺にも B29 の空襲があったことなども記されている。同封の写真は日比野の近影で、背後には蘇峰の書が見える。</p>  |
| <p>しょうりき まつたろう<br/><b>正力 松太郎</b></p> <p>(野球)</p> <p>明治 18 年～昭和 44 年<br/>(1885～1969)</p> <p>富山県射水市出身<br/>[蘇峰より：22 歳年下]<br/>[当館所蔵書簡：35 通]</p> | <p>実業家・政治家。東大卒業後警視庁に入る。大正 13 年虎ノ門事件の責任を取って警視庁警務部長を辞任。同年読売新聞の社長となる。昭和 9 年プロ野球球団・読売巨人軍の前身に当たる大日本東京野球倶楽部を発足。同 27 年日本テレビを設立。政界にも進出し、初代科学技術庁長官、原子力委員会委員長、国家公安委員長などを歴任。「テレビ放送の父」・「プロ野球の父」と呼ばれ、昭和 34 年に野球殿堂入りしている。</p> <p>……………◆<b>展示書簡要旨</b> 昭和 22 年 4 月 29 日付◆……………</p> <p>楽嶋に収監中の正力に届いた、蘇峰からの手紙に対する礼状。蘇峰の持病が早く良くなるようにと願い、88 歳の祝賀が出来ることを心から楽しみにしていると伝えている。</p>  |
| <p>おおくま しげのぶ<br/><b>大隈 重信</b></p> <p>(野球)</p> <p>天保 9 年～大正 11 年<br/>(1838～1922)</p> <p>佐賀県佐賀市出身<br/>[蘇峰より：25 歳年上]<br/>[当館所蔵書簡：16 通]</p>     | <p>政治家、教育者。外務大臣、農商務大臣、内閣総理大臣(第 8・17 代)、内務大臣、貴族院議員などを歴任した。早稲田大学の創設者であり、初代総長である。明治 44 年 11 月 22 日にアメリカ大リーグ選抜チームと早稲田大学野球部の試合における大隈重信の始球式は、記録に残る最古の始球式とされている。(投手に敬意を払い、打者はボール球でもバットを振るといふ慣行もこの時に生まれた)</p> <p>蘇峰は大隈の秀でた行動力を次のように評している。「如何なる苦境に陥るも、常にそれを切り抜け、禍転じて福となすの方便を講ずることを怠らなかつた(中略)早稲田大学の基を定め、慶應義塾大学と互角の角力を取るようになったのはその一例といつてよろう」(『蘇翁感銘録』より)</p> <p>……………◆<b>展示書簡要旨</b> 明治 30 年 10 月 13 日付◆……………</p> <p>大隈は明治 22 年 10 月 18 日、条約改正に反対する玄洋社の来島恒喜から爆弾による襲撃を受け右足を切断し辞職した。その遭難事件から 8 年目にあたる明治 30 年 10 月、早稲田の私邸でユーモラスな「追懐の為の園遊会」を開いた。その際の招待状である。</p> |

|  |   |
|--|---|
| <p>みやたけ さぶろう<br/><b>宮武 三郎</b></p> <p>(野球)</p> <p>明治 40 年～昭和 31 年<br/>(1907～1956)</p> <p>香川県高松市出身<br/>[蘇峰より：45 歳年下]<br/>[当館所蔵書簡：2 通]</p>    | <p>プロ野球選手。学生時代から投打ともに抜群の実力を兼ね備えた。大正 14 年夏、高松商業学校で甲子園全国制覇を達成。慶應大に進み、その活躍で「慶應の超ド級」と称された。宮武の大学時代の本塁打 7 本の記録は、立教大・長島茂雄の登場まで破られなかった。昭和 11 年に結成された阪急軍の初代主将として、草創期の日本プロ野球の人気を支えた。戦後は専売公社の野球部監督を務めた。没後の昭和 40 年に野球殿堂入り。</p> <p>……………◆<b>展示書簡要旨</b> 昭和 12 年 11 月 26 日付◆……………</p> <p>米国大リーグの球場を参考にして、日本初の 2 階建てスタンドや全面天然芝グラウンドを持つ、「阪急西宮球場開場記念」の絵葉書。その球場で、主将として活躍する宮武の誇らしげな姿が文面からも伝わってくる。</p>   |
| <p>こいすみ しんそう<br/><b>小泉 信三</b></p> <p>(野球・テニス)</p> <p>明治 21 年～昭和 41 年<br/>(1888～1966)</p> <p>東京都芝区出身<br/>[蘇峰より：25 歳年下]<br/>[当館所蔵書簡：3 通]</p> | <p>経済学者、教育者。小泉信吉(第 2 代慶應義塾塾長)の長男。6 歳の時に父が死去し、福沢諭吉邸に引き取られた。英、独、仏に留学、大正 5 年帰国し母校慶大の教授となり、昭和 8 年には塾長に就任。イギリス古典派経済学研究とマルクス主義批判で知られる。昭和 18 年秋、軍部や文部省が反対する中、出陣学徒壮行早慶戦(野球)を決行。その功績により、昭和 21 年野球殿堂入りした。戦後は皇太子明仁親王の教育と皇室の近代化に尽くす。昭和 34 年文化勲章受章。</p> <p>……………◆<b>展示書簡要旨</b> 昭和 19 年 5 月 30 日付◆……………</p> <p>徳富蘇峰は福沢諭吉とその弟子を引き合いに、欧化主義や愛国心、個人主義について、蘇峰自らが会長を務める言論報国会の機関誌に自論を掲載した。それを読んだ小泉からの反論が送られた。「『言論報国』(昭和 19 年 3 月号)に掲載された「蘇翁漫談」内の福沢評論に承服しかねる 3 点があるので、これについての所感、文献的事実を「三田新聞」(546 号)に書き綴りました。決戦戦局に於ける言論報国会の任務に関して一会員として所感がありますので、鹿子木博士まで申述べました。宜しく申し上げます。」</p> |
| <p>ひがし かつくま<br/><b>東 勝熊</b></p> <p>(柔術)</p> <p>明治 14 年～不明<br/>(1881～不明)</p> <p>鹿児島県串木野市出身<br/>[蘇峰より：18 歳年下]<br/>[当館所蔵書簡：5 通]</p>           | <p>柔術士・柔術伝道師。同志社卒。同志社で柔術を指導。アメリカ、ドイツ、フランスを渡り歩き、エール大学、ベルリン大学に在籍し、欧米に柔術を伝播した。身長 160cm の勝熊は、ニューヨークで屈強のプロレスラーと他流試合を行い、その活躍で「jiu-jitsu」ブームを牽引した。</p> <p>……………◆<b>展示書簡要旨</b> 明治 42 年 6 月 4 日付◆……………</p> <p>10 年ぶりに同志社同窓の伊達源一郎(国民新聞編集局長)とドイツで会い、「懐旧の念を禁じ難し」と蘇峰に伝えている。その伊達とのベルリンからの連名絵葉書。</p>   |
| <p>みしま やたろう<br/><b>三島 弥太郎</b></p> <p>(三島弥彦の兄)</p> <p>慶應 3 年～大正 8 年<br/>(1867～1919)</p> <p>鹿児島県鹿児島市出身<br/>[蘇峰より：4 歳年下]<br/>[当館所蔵書簡：1 通]</p> | <p>銀行家。三島通庸(明治時代の内務官僚・子爵)の長男。三島弥彦(日本人初のオリンピック選手・短距離走)の兄。2 歳の時に父親を亡くした弟の弥彦を心身共に支えた。貴族院議員、横浜正金銀行頭取を経て第 8 代日本銀行総裁に就任するも、任期中に病死した。弥太郎は徳富蘆花の小説「不如帰」の登場人物・川島武男のモデルとしても知られる。</p> <p>……………◆<b>展示書簡要旨</b> 大正 4 年 11 月 11 日付◆……………</p> <p>第 2 次大隈内閣は、「言論尊重内閣」の象徴として、異例の新聞人叙勲を行った。徳富蘇峰(国民新聞)は、黒岩涙香(万朝報)、村山龍平(朝日新聞)、本山彦一(大阪毎日)らとともに勲三等を受章した。その叙勲に対する祝賀の手紙。蘇峰(国民新聞)は、黒岩涙香(万朝報)、村山龍平(朝日新聞)、本山彦一(大阪毎日)らとともに勲三等を受章した。その叙勲に対する祝賀の手紙。</p>   |

|  |   |
|--|---|
| <p>ながおか がいし<br/><b>長岡 外史</b></p> <p>(スキー)</p> <p>安政 5 年～昭和 8 年<br/>(1858～1933)</p> <p>山口県下松市出身<br/>[蘇峰より：5 歳年上]<br/>[当館所蔵書簡：2 通]</p>                     | <p>陸軍軍人・政治家。陸軍中将、陸軍省軍務局長、第 13・16 師団長等を歴任。退役後は衆議院議員を務めた他、帝国飛行協会理事として我が国の航空界に尽力。第 13 師団長時代、視察に訪れていたオーストリア軍人のレルヒ少佐が伝えたスキーを軍隊に初めて導入し、これが“日本スキーの発祥”と言われている。</p> <p>……………◆<b>展示書簡要旨</b> 明治 44 年 7 月 10 日付◆……………</p> <p>「以前お話していた『肥後物語』を別便でお届けしますので、お暇な折にお読み下さい。筆者は当時の達識なる陰陽家のようなです。」読了後には戻して欲しい旨を伝えている。</p>   |
| <p>ささかわ りょういち<br/><b>笹川 良一</b></p> <p>(モータースポーツ・競艇)</p> <p>明治 32 年～平成 7 年<br/>(1899～1995)</p> <p>大阪府箕面市出身<br/>[蘇峰より：36 歳年下]<br/>[当館所蔵書簡：9 通]</p>         | <p>政治運動家・社会福祉活動家。昭和 6 年国粋大衆党を組織して総裁となり、17 年の翼賛選挙で衆議院議員に当選。戦後は A 級戦犯容疑者として巣鴨に収監されたが不起訴。釈放後、全国に競艇を普及させ、全国モーターボート競走会連合会会長、日本船舶振興会会長に就任。社会奉仕活動家として知られ、競艇(ボートレース・公営競技)の収益金を基に、船舶・造船事業の振興、海運安全の推進、福祉・国際援助活動、各種武道・スポーツ団体への協力などさまざまな慈善事業を行った。昭和 57 年には国連平和賞を受賞した。</p> <p>……………◆<b>展示書簡要旨</b> 昭和 25 年 6 月 25 日付◆……………</p> <p>「熱海の晩晴草堂に蘇峰を訪ねた際にいただいた軸物を飾り、殺風景な床も見違えるようになりました。」と伝えている。礼状を出す前に蘇峰から手紙を受け取ることになり恐縮している様子が伝わる。</p> |
| <p>とくがわ いえさと<br/><b>徳川 家達</b></p> <p>(“幻の東京オリンピック”<br/>組織委員会委員長)</p> <p>文久 3 年～昭和 15 年<br/>(1863～1940)</p> <p>江戸城田安屋敷<br/>[蘇峰と同年齢]<br/>[当館所蔵書簡：14 通]</p> | <p>徳川宗家の 16 代当主。政治家・公爵。徳川(田安)慶頼の三男。幼名は亀之助、号は静岳。版籍奉還により静岡藩知事、貴族院議長、ワシントン軍縮会議全権委員、日赤社長をはじめ各種団体の名誉職に推される。相撲通としても知られる。大正 10 年には大日本蹴球協会(現在の日本サッカー協会)の名誉会長として、その発足に立ち会った。また昭和 15 年に東京オリンピック招致が成功すると、IOC 委員であった家達は第 12 回オリンピック東京大会(“幻の東京五輪”)組織委員会の委員長に就任した。</p> <p>……………◆<b>展示書簡要旨</b> 明治 44 年 5 月 9 日付◆……………</p> <p>「御願いしておりました貴下(蘇峰)の写真を、早速にお送り下さりありがとうございます。お申越しの私の写真も一葉お届けしますのでよろしく願いいたします。」</p>                       |

<<参考文献>>

- ・『蘇峰とその時代』高野静子著 中央公論社 1988 年 ・『続・蘇峰とその時代』高野静子著 徳富蘇峰記念館 2002 年
- ・『コンサイス日本人名事典(第 4 版)』三省堂 2001 年 ・『大人名事典』平凡社 1953 年
- ・『金栗四三の生涯』(洋泉社 MOOK) 2018 年 ・玉海市立歴史博物館『マラソンの父・金栗四三』図録 ・Wikipedia
- ・『蘇翁感銘録』徳富猪一郎著 實雲社 1944 年
- ・『報告書』1939 年発行 非売品
- ・『いだてん 前編 NHK 大河ドラマガイド』NHK 出版 2018 年

末尾となりましたが、今回の展示に関してまして以下の方々にご協力をいただきましたのでここに謝意を表します。

玉海市立歴史博物館こころピア、茅ヶ崎壱外館の皆様、

(株)ローヤル企画編集部 廣井章子氏、高田俊弘氏、小宮一夫氏、

山本陽一氏

|                  |   |
|------------------|---|
| 2019 年 1 月 5 日発行 | 定価 100 円(税込)  |
| 編集               | 塩崎 信彦 宮崎 松代   |
| 発行者・発行所          | (公財)徳富蘇峰記念塩崎財団  |
|                  | 代表理事 高野 信篤  |
| 〒259-0123        | 神奈川県中郡二宮町二宮 605   |
| TEL 0463-71-0266 | Fax 0463-71-0677  |
| ホームページ           | <a href="http://www.soho-tokutomi.or.jp/">http://www.soho-tokutomi.or.jp/</a> |